rather than doing it by themselves.

2. Someone who is **organized** plans their work and activities efficiently.

b. [*CALD*[3]]

organized:

1. arranged according to a particular system
2. describes someone who is able to plan things carefully and keep things tidy
3. (of travel, visits, activities, etc.) planned and arranged for you to do, especially as part of a group

c. [*OALD*[7]]

organized:

1. [only before noun] involving large numbers of people who work together to do sth in a way that has been carefully planned
2. arranged or planned in the way mentioned
3. (of a person) able to plan your work, life, etc. well and in an efficient way

[*COBUILD*[5]] の第二義、[*CALD*[3]] の第二義、[*OALD*[7]] の第三義が（10）の organized の意味に当たるが、日本語の訳には十分には表れない、「何事においても、きちんと考え、用意周到にきっちりと行う」といったような organized の語の雰囲気が十分伝わってくるだろう。

このように、英英辞典の語義を読むだけで、英和辞典の日本語による語の意味の説明だけでは分からない、語の微妙なニュアンスを知ることができるのである。(注：紙幅の都合で書くことができないが、前号の語研ニュース（No. 21）で取り上げた "apparently" なども、英英辞典を引くと、英和辞典では十分には分からない語感がよく伝わってくる。ぜひ英英辞典を引いて確かめていただきたい)。

４．まとめ

以上見てきたように、英英辞典は英和辞典では十分に探ることができない語のニュアンスを探ることができることがよく分かっていただけたと思う。また中でも [*COBUILD*[5]]（『コウビルド英英辞典 改訂第５版』）は、語義の部分から語の使い方を探ることができることがよく分かっていただけたと思う。本稿で示したように、英英辞典も辞典ごとに特色があるので、できれば複数の英英辞典を手許に置いていただきたいが、学生諸君は1冊でもいいので、ぜひ手許に置いて英語学習に大いに活用していただき、英語の奥深さ・英語の楽しさを体感していただきたいと思う。

独学で語彙力をつける方法とは

名古屋語学教育研究室
林　姿穂

１．語彙習得における問題点と背景

第二言語（Ｌ２）の語彙を如何に覚えて語彙力を伸ばすか、その方法についは自分自身で試行錯誤して見つけ出そうとしてきたのではないだろうか。家庭学習で単語の暗記がどのような方法でされているかは学習者まかせになっていることが多く、外国語講師があまり介入していないように思われる。私自身が学生時代に受けた英語の授業を振り返ってみても、学習のペース作りとして単語テストを受けるという形が多かった。授業では語彙力強化のみに焦点を当てるというよりは英語の技能を全体的にアップさせることを目的としている事が多い。知っている単語「数」が重要であると考えて学ぼうとする多くの第二言語学習者に対し、教育現場では文法や読解といったその他の知識を重視するので、両者間でずれがあると指摘する研究者や専門家もいる。ほぼ独学で、多くの単語を覚えようと試みる学習者は大学生だけでなく、中学高校で単語テスト準備をする生徒にも当てはまる。ここではＬ２の語彙を習得するとはどういった状態を指すのか明確にしたい。また、独学で語彙力強化に努める学習者に効果的な学習法をいくつか提案したい。

２．語彙力の捉え方

語彙力があるとはどのような状態を指すのだろうか。例えば学習者が、Ｌ２の単語を聞いて第一言語（Ｌ１）の訳語が分かる事だと考える学習者もいるだろう。また、単語の綴り（spelling）を見て訳語が分かるということが語彙を獲得したことになると思う者もいるかもしれない。しかしそのような知識だけでは一部分の知識であるとしか言わざるを得ず、それらの単語がどのように使われるかまでは理解できたと言えない。語彙が習得される最良の条件は実際にはどう使われるか(real contexts）を学ぶことであるという多くの指摘がある。英語学習者における語彙習得に置き換えるならば、まずは英語で書かれた新聞記事や文学作品、実際の会話での語彙の使われ方に注目する事である。そして real contexts での単語の働きと意味を覚えるよう心がけることである。語彙力がつくということは、使い方が分かる段階でもあり、更にはその単語を自由にアウトプットできるレベルに到達することでもある。

３．日本人学習者に見られる典型的な学習法

Ｌ１である漢字や平仮名を覚えるときに日本人学習者は何度も文字を書いて学習してきたことは言うまでもない。その学習法をそのままＬ２習得の際にも利用してしまうのはごく自然なことである。電車の中で、英語のつづりを指で描くかのように単語を覚えている学生をよく目にするのもそのためだろう。過去の研究結果によると、新出単語をカードやリストに書きとめ繰り返し書くことはあまり効果が無いと一部で指摘されている。しかし、日本人学習者に当てはめた場合、繰り返し書くという学習法が学習者の好みの学習スタイルであれば単語単位の反復練習も完全否定することはできない。日本人学習者の典型的な学習方法がＬ２習得の際にも転移する傾向があると考えられ、それが学習者の満足度を高めているとするならば、有効な学習法として活かすべきだと思う。よって、繰り返し書くことと real contexts の理解を同時に促す学習方法を如何に取り入れていくかが課題となる。

４．Ｌ１の学習法の問題点

Ｌ１の学習経験をそのままＬ２の学習方法として適応される事があると述べてきたが、Ｌ１の場合、母語であるため単語の発音とその言葉の使い方をほぼ無意識のうちに理解していることが前提である。その上で繰り返し書く学習をするので有意義な効果がある。しかし、Ｌ２の語彙習得の際に同じことは当てはまりにくい。Ｌ２の単語だけを繰り返し書いたり音読することは語彙のみを増やす上で効果的であり一時的に学習者の満足度を高めるが、real contextsに意識しながら学習することを怠ってしまう可能性がある。そのためＬ１習得と同じだけの効果を期待することはできないだろう。好みにあった学習スタイルで語彙習得を試みると同時にＬ１とＬ２の語彙習得の過程の違いにも是非学習者に注目してもらいたい。

５．語彙力強化のための学習法と今後の課題

学習者好みの学習スタイルを尊重しつつ、私自身が担当したクラスでは以下のような語彙力強化のための学習法を提案してきた。その中でも特に好評だったものをここで紹介したいと思う。

１）オリジナル単語カードを作成する

ＴＯＥＩＣ問題集など現在使っている教材（音声付）の会話文やアナウンス文で出てきた新出単語をカードに書く。音声は必ず３度以上聞く。１度目は文字を見ながら読まれている箇所を指で追い、音声と文字（単語の綴り）を一致させ、意味の理解を深めるよう心がける。２度目は文字から目を離して、英文を聞くことに集中し、聞いて意味が分からない単語が出てきたらスクリプトを使って再度、文字、発音と意味を確認する。３度目は、スクリプトを見ないで Shadowing を行う(Shadowing とは１文を聞き終わってから繰り返し言うのではなく、音声を聞いた直後にその言葉をアウトプットすること)。最後に自分で作成した単語カードを使って読み書きの反復練習を行う。このことで real contexts に近い状態の中で単語の使われ方を学ぶことが出来る。綴りだけでなく音声も頭に入るのでＬ１の語彙習得に近い学習が可能になる。

２）単語集（市販のもの）を活用する

市販のＴＯＥＩＣや英検対策の単語集、または

大学受験のために高校時代に使い込んだ単語集を１冊用意する。過去に使い込んだものがあればそれが好ましい。

現在使用している問題集で長文読解やリスニング問題を解いているときに、見覚えはあるが意味が分からない単語が出てきたら、手持ちの単語集の索引を見て、同じ単語がないか確認する。もしも出てきたらその単語が含まれる例文を数回音読して、単語がどのように使われているかを確認する。このことで、同じ単語であっても違う使われ方がされていることに注意が向く。またその単語をリストかカードに書きとめることで、単語単体ではなく例文を含めた単語のイメージがインプットされる。自分で作成した単語リストを見た際に例文も頭に思い浮かべるよう心がける。

実際に学習法を実践した学生は「単語が覚えやすくなった」「英単語が読めるようになることで、忘れにくく記憶に残りやすくなる」などとコメントしている。その一方で Shadowing が上手にできない不満や、今までの学習法から脱却することへの不安の声もあるので、今後の課題として検討していきたい。

D.H.ロレンスの動物の描写について（その３）

経営学部
山田　晶子

前号にひき続いて今回も、ロレンスの作品に登場する動物と主題を関連させてその作品を紹介しようと思う。今回は雄鶏（cock）を取り上げる。

1928年に雑誌『フォーラム』（*Forum*）に掲載された中編『逃げた雄鶏』（*The Escaped Cock*）は、ロレンスの死後の翌年の1931年に本として出版されたときは題名が『死んだ男』（*The Man Who Died*）に変更されたが、ロレンス自身は『逃げた雄鶏』という題名の方を気に入っていたということである。現在では一般に『死んだ男』という題名で通っている。このように題名に表われている「雄鶏」と「死んだ男」は作品の主題と密接に関わっている。

この作品の舞台背景はエルサレムであり、時代はイエス・キリストが処刑された直後である。死んだ男と言う人物は一度も名前が書かれていないのであるが、文脈からイエス・キリストを指していることが分かる。小説は第１部と第２部に分かれており、第１部で百姓夫婦が飼っている雄鶏が登場する。この雄鶏は夫婦が飼っている他の家畜の雌鳥やロバとは異なって生命力に溢れている。夫婦は雄鶏が逃げないようにと、その片足を紐で繋いでいる。一方死んだ男は処刑されたのだが十字架から降ろされて経帷子に包まれて安置されていたところ、誰にも知られずに蘇えってフラフラしながら百姓夫婦の家にたどり着き、そこで匿われることになった。彼は、雄鶏が一度百姓の家から逃げ出したときに挙げた鬨の声に刺激を受けて蘇えったのであった。このように、死んだ男の蘇りに雄鶏は大きく関わっているのである。だが単に生き返ったというだけではロレンスの主題は十分に描ききれない。いったん逃げた雄鶏はまた百姓に捕まえられ、匿われている男と一緒の敷地にいることになる。

空は青く周囲には緑が溢れている。そして雄鶏は同様に色鮮やかでオレンジ色と黒色の羽毛が生えており、鶏冠は赤くていかにも生命力豊かという印象を与えている。雄鶏はいくら縛られても大胆に外の未知の世界に向かって挑戦の雄叫びを上げて、雌鳥に跳びかかる。一方ロバは愚かでどんちょうである。この雄鶏とロバという２種類の動物の対立する性質は、死んだ（そして蘇った）男と他の人間に喩えられている。死んだ男の色は白色である。白色は彼がこの世に蘇って他の人間とは全く異質になっていること、つまり彼が浄化された色として表現されていると思われる。

雄鶏が、縛られていても憤慨と挑戦の気持ちを失わず、「彼（雄鶏）の生命は気味が悪いほどに砕けなかった」と書かれているのと同じく、死んだ男も強い生命力を持っている。彼は、意志に反